
お寺の怪

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お寺の怪

【Nコード】

N8051E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

タイの首都バンコク。ここのある廃寺で不気味な声が聴こえてくるといふ。それを聞いた日本人ジャーナリスト勝矢が見たものとは。

第一章

お寺の怪

タイ王国。ここは言わずと知れた仏教の国だ。

国王は仏教徒でなければならずかつ全ての宗教を保護しなければならぬ、こうした法律まである。タイはまず仏教がある国家なのだ。

そのバンコクで今話題になっていることがある。それは極めて奇怪な話であった。

「お寺からか」

「ああ、そうなんだ」

バンコク市民達は集まれば顔を顰めさせてこう囁き合うようになっていた。何の話をしているかといえばこれが幽霊のことなのだ。

「見た奴がいるらしい」

「やっぱり出るのか」

「ああ、何でも髪を振り乱した女の霊らしい」

幽霊では何処の国でもよく出る種類のものだと言えるだろうか。それはどうやらタイでも同じらしい。

「凄く奇麗だけれど蒼ざめた顔でな」

「寺の中にいるのか」

「何か探しているらしい」

そういう話になっていた。

「心中した相手か何かをな」

「その女は心中したのか」

「そうらしいな」

話は勝手にそうなる。こうした話というものは作り話が作り話を生み出していく。今回もそれは同じであった。

「それで相手の男を探してな」

「おっかない話だな、おい」

「だから怖いんだよ。姿を見たらそのまま寺まで引き擦り込まれて肝を食われるらしい」

こんな話になっていた。またある噂では若い女ではなく高位の僧侶の話になっていた。

「昔バンコクにいた偉いお坊様がな」

「ああ」

「成仏されて御仏になられたんだ」

「それなのか？」

「そういう話だ」

こういう話にもなっているのだった。

「それで毎日あの寺の中で念仏を唱えてタイの安泰を願っているらしい」

「我が国のか」

「陛下のことも王室のことかな」

タイでは王室は絶対の存在だ。国王なくしてタイはないと言っても過言ではない。

「祈願しつつ念仏を唱えているらしい」

「そういえばあの寺は」

「どうしたのだ？」

「かつては名のある寺だったそうだな」

こういう話にもなっているのだった。ある時は魔物がいてまたある時はこうした話になっている。実に正体のわからない寺になっている。

「そうなのか」

「そのお坊様がおられた寺らしい」

「それでか。今もここにいて」

「そうだ」

話はさらに進む。

「だからあの寺に近付いてはいけない」

「祈願の念仏を邪魔しないようにだな」

「そういうことだ」

こうして様々な話が出てそれぞれが全く矛盾していた。この話はやがて日本の商社マン達の間にも伝わりそこからすぐにネットでの話題となった。それをネットで見たある男が興味を持って早速このバンコクに來たのだった。おちよぼ口で色の白い坊ちゃん刈の男だった。紫の半袖にジーンズというラフだが悪趣味な格好だ。

「宜しくね」

「ええ」

何とオカマ言葉を使う男だった。現地で雇ったガイドの案内を受けて今バンコクに來ていた。

「バンコクに來たのは最初じゃないけれど相変わらずいい街ね」

「そうですか。そう言って頂けると」

「可愛い男の子は多いし」

男は笑って言う。

「食べ物美味しいし本当にいい場所だわ」

「そういえば勝矢さん」

「何かしら」

ガイドは彼を勝矢と呼んできた。彼もそれに応える。

「今回ここに來た目的は何ですか？」

「当然仕事よ」

にこにこと、だがはっきりとわかる好色そうな笑みを浮かべてガイドに答えてきた。

「ここに幽霊が出るお寺があるそうじゃない」

「ああ、あそこですか」

ガイドはそれを聞いてすぐにわかったようだった。

「あのお寺ですね」

「わかってるのね。それだと話が早いわ」

「って行かれるんですか」

「その取材で來たのよ」

勝矢はこう彼に答える。

「だから行きたいのだけれど」

「お勧めはしませんよ」

しかしガイドはここで暗い顔をして勝矢に言うのだった。

「あそこは」

「偉いお坊様のお祈りを邪魔するからかしら」

「いえ、鬼女が出るんで」

彼はこう聞いていたのだった。

「姿を見たら三日で死ぬそうですよ」

「三日ね」

「犬も近寄りませんし」

犬まで話に出す。

「当然猫も」

「可愛い男の子は？」

「近寄る筈ありませんよ」

今度は何を今更、といった調子で勝矢に言葉を返してきた。

「もう誰も近寄りませんよ」

「そうなの」

「大きな音がしてそれに戸惑っていたら棺桶に引き擦り込まれるって言われていますし」

「怖いわね」

それを聞くと勝矢も少しだが顔を顰めさせる。

「それは」

「けれど仕事ですよね」

「ええ」

あらためてガイドの言葉に頷く。

「そうよ。こっちだって編集長命令なんだから」

「日本の雑誌っていうのは随分と無茶な仕事をやらせるんですね」

「うちの編集長は特にそうね」

少し考えた後でガイドに答える。

「それで有名な人だから」

「そうなんですか。それでそのお寺に、ですよね」

「案内して欲しいけれど駄目かしら」

「こっちも仕事ですから」

こう前置きしなければならぬというところに今回このガイドがどれだけ乗り気ではないということかがわかる。とにかく嫌なのだ。

「引き受けさせてもらいますよ」

「お金は弾むから」

「日本人はだからいいんですよ」

とは言ってもタイ人特有のあの屈託のない笑みではなく苦笑いである。

「お金払いがいいから」

「若し悪かったらどうするの？」

「おさらばです」

左手でバイバイ、といった動作を試みせる。

「お金の切れ目が縁の切れ目ですよ」

「シビアね」

「タイ人ですから」

今気付いたが彼は随分と流暢な日本語を話している。勝矢はそれに気付いたのだ。

第二章

「お金にはシビアですよ」

「そうなの」

「で、お金はどれだけで」

「これだけでどうかしら」

前以って札束を出してみせる。

「まず最初はこれだけで」

「これからも頂けるんですね」

「これが一日分よ」

続いてこう断る。

「明日は同じだけ支払うけれどどうかしら」

「ええ、それだけ出してくれるのならいいですよ」

ガイドも今度は屈託のない笑顔になる。今度はそうだったのだった。

「喜んで」

「そこには誰も寄らないのよね、それでもいいのね」

「お金の為なら例え火の中水の中」

どうにも随分とご都合主義的に話が変わっていた。しかし勝矢はそれは特に気には留めなかった。タイ人らしくていいと思っていたのだ。

「行きますよ」

「信頼してるわよ。それじゃあ」

「はいはい、それではこちらに」

「案内してくれるのね」

「途中まで」

ところがこう来たのだった。

「案内させて頂きますよ」

「最後までじゃないのね」

「それはまああれです」

にこにこと笑って勝矢に言ってきた。

「このラーマ、命あつての物種ですから」

「ああ、あんたの名前ラーマっていうのね」

「その通り」

さりげなく自分の名も伝える。

「いい名前でしょう」

「そうね。じゃあラーマさん」

「はいはい。途中までなら」

「お昼を食べたら追加料金よ」

「むっ!？」

追加料金と聞いたところでラーマの顔色が一変した。さらに明るいものになったのだ。見れば両目にお金のマークが浮かび上がっていた。バーツのそれだ。

「それは本当ですか!？」

「私は嘘はつかないわよ」

勝矢も心得たものでにこにこと笑って彼に囁く。

「ただし。条件があるのだけれど」

「ですが私もまあ」

「二倍よ」

笑ってさらに囁く勝矢だった。

「それでどうかしら」

「いや、日本人商売上手」

にこにこと笑って身体をあげてきた。

「誠意は受け取りました。それじゃあ」

「御願いするわね」

「実はいいお店を知ってるんですよ」

「食べ物ね」

「ええ。まずはそちらに入って」

好きなものも食わせて欲しいというのだ。さりげなく図々しいが

やはり嫌味がない。

「ゆつくりとたつぷりと食べながらお話しましょう」

「可愛い男の子がいればいいわ」

勝矢も乗り気だった。さりげなく条件を出したうえでそれを認める。

「いるのかしら、美少年」

「何を仰るやら」

ラーマはまた笑って彼に言ってきた。

「タイは美少年の宝庫じゃありませんか。それは御存知でしょう？」
「まあそうですね」

勝矢もにこにこ笑ってそれに頷く。実は彼も知っているのだ。タイは所謂ニューハーフや同性愛に対して非常に寛容でそうした趣味もよくある話なのだ。ある意味日本以上に。

「それじゃあそういうことで」

「はい、それでは」

こうしてその可愛い男の子のいるいいお店に向かいそこで細かい商談をしたうえで二人は店を出た。交渉は成功であり二人はにこにこした顔でバンコクの街を歩きつつ話をしていた。

「いや、やっぱり日本人はいいですね」

「そうかしら」

「親切で気前がいい」

タイではこう評判なのは事実だ。お人よしでカモにされているという一面はあるにしろ。

「だから私は日本人のガイドがメインですね」

「お金になるのね」

「しかも仕事し易いんですよ。かなり任せてくれますから」

「あまりあだこうだ言わないのは事実ね」

外国人に関してはだ。少なくとも勝矢はそうである。

「それぞれの国の文化があるから」

「そういうことです。私も最初日本人には随分戸惑いました」

「どういうことに？」

「あれです。生ものをやけに食べたがるのね」

「それはあるわね」

これは勝矢にもよくわかることだった。それを聞いてにやりとしていた。

「お刺身よね」

「お魚だって色々食べるし」

「大体生ものが好きなのよ」

「私等が食べないような。それこそほら」

ここで道の猫を指差す。見ればシャム猫が鯛を食べていた。

「鯛ね」

「あんな猫の餌にしかならないような魚を美味しそうに食べるんですから」

「あれは猫の餌なの」

「他に何かあります？」

ラーマは首を傾げて勝矢に問う。

「どうかあれは美味しいのですか？」

「最高よ」

にこりと笑っての返事だった。

「特にそのお刺身にしたらね」

「そうなんですか」

ラーマはまた首を傾げる。どうにも納得できないのがわかる。だが勝矢はそんな彼の戸惑いに構うことなくここで話を変えてきたのであった。

「それはそうとね」

「ええ」

「いい子だったわね」

「ええ、そうでしょ」

勝矢のスケベそうな笑顔に応えて彼もそうした顔になっていた。

「いや、最初見た時は私も驚きまして」

「美少年よねえ。惚れ惚れしちゃったわ」

勝矢は自分の両頬にその両手を添えていた。恋する顔になっていた。

「肌は黒くてそれでいて細やかで」

「顔立ちもいいでしょ」

「最高よ。ハンサムで」

やや古い表現をあえて使う。

「仕事が終わったらあの子にアタックよ」

「日本人はそういうの好きですね」

「男の子が？」

「ええ。そういう人もよく見ます」

顔が少し真面目になっていた。

「それには驚きませんが」

「日本では昔からこういうことがあったからね」

「そうらしいですね」

「そうよ。男が男を好きになってもいいじゃない」

勝矢の偽らざる本音でもある。

「そこんところどうかしら」

「別にいいと思いますよ」

ラーマもそれは特に否定しない。二人の足は何時しか人気のない場所に向かっていた。それまで普通のバンコクの住宅地だったのが次第に人影が少なくなり。目の前の大分向こうに古ぼけた寺が見えてきていた。しかし二人はその話に夢中でまだそちらには顔を向けてはいない。

「それも」

「タイではいいのね」

「日本でもですよね」

「そうよ」

またラーマに答える。

「そうなのだけれど」

「何かありますか？」

「変な目で見られるのは確かだね」
「こう言っただけだよ。」

第三章

「どうにもこうにも」

「どうにもこうにもですか」

「あれよ、最近我が国もおかしいのよ」

さらにぼやき続ける。

「こうしたことは我が国では昔からあるのに」

「そんなに昔からですか？」

「千年以上前からあるのよ」

「へえ、それはまた古いですね」

「ええ。それだけ親しみがあるものなのよ」

これは事実だ。日本では寺でも貴族社会でも武士達の間でも普通にあったのだ。貴族のそうした日記も残っているし織田信長はあまりにも有名だ。当然ながら江戸時代でもそうだ。

「それがね。どうもこの五十年か六十年は」

「けれどそれで捕まった人はいませんよね」

「当たり前よ」

おちよぼ口を尖らせてラーマに答える。

「何でそれで捕まるのよ」

「ヨーロッパだと捕まっていますよ」

「昔の話よね」

「確かに昔は昔です」

キリスト教の倫理観に基く。キリスト教では同性愛は忌まわしい悪徳なのだ。その為フランススコルザビエルが愕然としたという記録もある。

「けれど本当に。それで処刑されたりも」

「馬鹿な話だわ。恋愛で死刑になるなんて」

同性愛もまた恋愛というのだった。勝矢は。

「おかしいわよね」

「まあそうですね。少なくともそれで捕まるのは」

「日本でそれで捕まった人間はいないわ」

「一人もですか」

「そうよ、一人も」

これは本当のことだ。

「何で捕まるの？」

「悪いことだからでしょうね」

やはりキリスト教ではそうなのだ。

「やっぱり」

「そんなの今から行くお寺でも普通だったわよ」

今やっとその目指す寺を見た。しかし話は相変わらずそちらの方だった。大きくかつては豪奢だったのだろうそのタイ風の寺院を見ている。やはり廃墟になっていて人はいそうにない。

「お寺でもね」

「ああ、それはわかります」

ラーマは勝矢のその言葉に対して頷いた。彼は密かに寺から視線を外している。

「お坊様は女の子に触れることは」

「あまり守られていなかったにしろね」

だがこれは大抵の国でそうだったのであまり関係ない。日本だけが悪かったわけではない。

「そういうことになっていたから」

「だから代わりにと」

「キリスト教も確か神父さんはそうよね」

「ええ、そうです」

意外と色々なことを結構知っているラーマだった。外見に似合わないインテリということか。

「それで男は以ての外なので」

「悪夢ね」

勝矢にすればそうであった。

「女も男も駄目なんていうのは」

「ですが日本では」

「どっちもよかったのよ」

そこが欧州と日本の完全な違いだったのだ。男色にしる度が過ぎなければよかったのだ。

「お坊様は一応男だけね」

「そうですか」

「今だとニューハーフもいいでしょうね」

そういうところには実に寛容な日本だった。

「それも大目にでしようね」

「いい社会ですね、日本は」

「一度来てみる？楽しいわよ」

「お金が貯まりましたら」

その屈託のない笑みで答えるのだった。

「そうさせてもらいます」

「是非そうするといいわ。さて」

「ええ」

ここで二人の顔が変わった。相変わらずにこにことした勝矢と暗くなり果てたラーマ。二人は遂にその寺の前にまで来ようとしていたのだった。

「いよいよね」

「そうですね」

ラーマは勝矢の言葉に対して答える。

「入りますか」

「やっぱり怖いのね」

「正直に申し上げましてその通りです」

その暗い顔ではっきりと答えるのだった。

「本当に鬼女が出て来たら」

「まあその時はその時ね」

だが勝矢の態度は相変わらずあっけらかんとしている。まるで平

気だ。

「鬼が出て来たら食べられるだけね」

「随分落ち着いていますね」

「こういうの。慣れてるから」

そのうえでの言葉だった。

「だからよ」

「慣れてるんですか」

「世界中回ったのよ」

勝矢は言う。

「その中には危険なことも随分とあったから」

「それですか」

「もっとも終わったら男の子だったけれど」

「じゃあ今回も」

「ええ、行くわよ」

ここでまたしても好色そうな笑みになる。そのおちよぼ口も垂れている目元も気持ち悪く曲がる。如何にもといった感じの顔だ。

「タイの男の子の細やかな肌があたしを待っているわ」

「お好きですねえ」

「目指すは男版ドン・ジョバンニ」

実に大胆な言葉だ。

「カタログまであるのよ」

「それでどれだけ進んでるんですか、それは」

「アメリカで三四人、中国で一九人」

「ほう、それはかなり」

「イギリスで七六人、ドイツで二四人、ベトナムで六二人、フィリピンで七九人」

かなり多い。国も様々だ。よく見たら自分でカタログを出して楽しみに言っている。

「このタイじゃ二六五人」

「おおっ!？」

「日本じゃ遂に一〇〇〇にいったわよ」

「本当の数字ですか！？それって」

「本当よ」

どちらにしろ人間離れした数字である。

「遂にね」

「随分堪能されていますね」

「何でも極めないと意味ないわよ」

それが勝矢の哲学らしい。

「この道だってね」

「では仕事が終わった後に」

「ええ。そうしましょう」

そう言いながら一歩前に出た。寺の中に入ろうというのだ。見れば庭も草ぼうぼうでかなり荒れ果てている。少し見ただけでかなり危なそうだ。

第四章

「蛇がいてもおかしくはないわね」

「そうですね」

ラーマもそれを考えていて不安げな顔になる。

「それは確かに」

「蠍とかも」

「蠍もですか」

「けれどどっちもいる危険あるでしょ」

「あるどころかなりですよ」

ラーマは蛇だの蠍だのといったところで顔を強張らせてしまっていた。怯えているのがはつきりとわかる。何しろここは暑いタイなのだから。蛇や蠍も多いのだ。

「それは気をつけないといけませんね」

「それでも入る？」

「入るつもりですよね」

「ええ、そのつもりよ」

しかしそれでも勝矢の決意は変わらないのだった。蛇だの蠍だのを聞いても。

「ここまで来てね」

「わかりました。それじゃあ」

「ただ。幾ら何でもあれね」

ここで勝矢は言ってきた。

「はい」

「正面から行ったら駄目ね」

こう言うのであった。

「正面から行ったらそれこそ」

「噛んでくれたの刺してくれたの言っているようなものですからね」
「確実に死ぬわね」

「はい、毒で」

そう言いながら正面を見る。即ちそこは寺の正門だがそこは一面草が生い茂っている。そういう場所にこそ蛇だの蠍だのがいるのだ。それを考えると虎の穴と変わらないのだった。

「何処か道を探しましょう」

「わかりました。それじゃあ」

「お寺の周りを探してね」

こうラーマに提案してきた。

「それで行きましょう」

「ええ。それにしてもあれですね」

「あれって？」

「幽霊と同じ位危ないんですね」

「そうね、蛇に蠍だから」

またそれを言う。

「確実に死ぬわよ」

「血清あっても危ないですよ」

「わかってるわ」

それがわかっていいるからこそ警戒しているのである。

「キングコブラなんかいたらそれこそ」

「あれに噛まれて助かった人って一人しかいないんですよ」

「らしいわね」

毒が強いだけでなくその毒の量もかなり多いからだ。伊達にキングコブラと言われているわけではない。実はかなり大型の蛇でもあるのだ。その助かった例にしろ夥しい量の血清を使っている。なおこの恐ろしい毒蛇は言うまでもなくタイにも生息している。だから二人は気をつけているのだ。

「ですから余計に」

「骨が折れるけれどね」

「骨が折れても命があればいいんですよ」

ラーマは実に率直に述べた。

「ですから」

「そういうことね。それじゃあ」

「ええ、探しましょう」

こうして二人で安全な道を探すことにした。程なくしてお寺の裏手に抜け道があった。そこから入られるようになっていたのであった。見つけたのはラーマであった。

「ここからなら大丈夫ですよ」

「蛇も蠍もいないわね」

「はい、ほら」

勝矢をその抜け道に案内していた。見ればそこはわりかし広い通り道になっていた。そこだけ草がないのだ。それが寺の建物のまで続いていたのである。

「あそこを通っていけば」

「安心して行けるわね」

「少なくとも今のところ道には蛇も蠍もいませんし」

「そうね。ただ」

「ただ？」

「出て来る可能性はあるわね」

「そう言ってまた警戒する目になる勝矢だった。」

「横から」

「じゃあどうしますか？」

「棒を持って行きましょう」

ラーマに提案する。

「道に蛇や蠍がいたらそれで横に払うのよ。どうかしら」

「それはいいですね」

ラーマもそれに賛成して頷いた。

「それだと安全に蛇や蠍をどけることができますね」

「そういうことよ。それじゃあ」

「はい」

こうして二人は棒を持って来て前や横を警戒しながらお寺へ進ん

だ。お寺の中に入ると次第に何やら声が聞こえてきたのであった。

「いるわね」

「噂は本当だったんですね」

ラーマはそれがわかって顔を青くさせてしまった。そのうえでまた言う。

「正直帰りたいですよ」

「ここまで来てそれはないでしょ」

「いや、それでもですよ」

泣きそうな顔でまた言う。

「噂じゃなくて本当にいたんですから」

「よかったじゃない。本当にいて」

「頭からバリバリと食べられたらどうするんですか」

「大丈夫よ。ほら」

彼を安心させる為かここであるものを出してきた。それは青紫の布地に銀色の刺繍がしてあり糸紐で結ばれた巾着であった。中央には何やら書いてある。ラーマはそれを見てまずは目をしばたかせた。

「これ、何ですか？」

「御守りよ」

「御守り!？」

「日本のお寺や神社で売ってるのよ。魔除けよ」

「ああ、それですか」

「それ付けていれば安心できるわ」

こう言ってまた彼に差し出してきた。

「あたしはもう一つ付けているから。さあ」

「日本のですか」

「そうよ」

またラーマに答える。

「当たり前じゃない。あたしは日本から来たんだから」

「そうですよね。まあ確かに」

「さっ、あげるわ」

彼に直接手渡した。その手に握らせる。

「これで大丈夫よ」

「わかりました。じゃあ頂きます」

「わかったら。行くわよ」

「有り難うございます。これ勝矢さんも同じもの持ってるんですよ」

「これよ」

自分の胸にかけてあるそれをシャツから出して彼に見せた。

「ちゃんとあるから。安心してね」

「ええ。それにしても」

「今度はどうしたの？」

「この声ですけれどね」

今も寺の中から聞こえてくるその声について述べてきた。

「噂とは違いますね」

「違うの」

「これはお経ですよ」

こう勝矢に述べる。

第五章

「よく聞いて下さい。タイ語で」

「あっ、本当ね」

今二人は日本語で話している。だが実は勝矢はタイ語もわかるのだ。それで耳をすませてみるとそれは確かにタイ語だった。タイのお経であった。

「確かに。これは」

「しかもです」

ラーマは耳でよくお経を聞き取りながら言葉を続ける。

「この声は」

「小さな子供の声ね」

「はい、間違いありません」

それもわかったのだった。

「この声は」

「子供の幽霊かしら」

「さて、そこまでは」

今の勝矢の問いには首を捻る。まだそこまでわからないというのである。

「見てみないと」

「じゃあどっちにしろ行くしかないわね」

「そうですね。じゃあ御守りに御願いをして」

「行きましょう」

「はい」

御守りを手渡した後でいよいよ中に踏み込む。するとそこにいたのは。

「あらっ!?!」

「えっ!?!」

勝矢もラーマも思わず声をあげた。目の前にいるその人を見て。

いたのは黄色い衣を着た丸坊主の少年だった。少年といよりはまだ子供だ。あどけない子供ながら一心不乱にお経を唱えているのだった。

「幽霊でしょうか」

「足、あるわよ」

ラーマは勝矢に問うてきた。勝矢はそのラーマの顔を見て応える。二人はそれぞれ首を左右に直角にして顔を見合わせていた。

「見たところ」

「日本の幽霊は足がないんですか？」

「タイではあるの？」

「ええ、まあ」

ラーマは場違いかつ少し呑気に勝矢に答えた。

「ありますけれど」

「そうだったの」

「はい、ですからこの子供も幽霊の可能性があります」

「幽霊がお経読むのかしら」

ここで勝矢はふとまた思うのだった。

「お経は幽霊をやっつけるものじゃないの？」

「日本ではそうなんですか？」

「やっぱりタイじゃ違うの？」

「ですから。高僧の噂もあったじゃないですか」

「あっ」

言われてそのことをやっと思い出す勝矢だった。

「そういえばそうだったかしら」

「そうですよ。ですから」

「やっぱり幽霊の可能性もあるのね」

「はい、そういうことです」

「ううん、だったら」

部屋に入って来たのにまだ自分達の存在に気付かず生真面目なまでに読経をしている子供を見て言う。言いながら考えている。

「一ついい考えがあるわ」

「いい考えといたしますと」

「まずこれをね」

また一つ御守りを出してきたのだった。

「出すわよ」

「はい」

「そしてこれを」

今度は鞆からあるものを取り出してきたのだった。それは。

「お菓子ですか」

「プリンよ」

ラーマに対して答えた。

「こっちで売っていた。マンゴープリンね」

「ああ、中国系のお菓子ですね」

「そういうこと。あたしこれ大好きなのよ」

タイでは華僑が多い。だから中国系のお菓子も至るところで売られているのである。勝矢はその中の一つを買っていたのである。

「だから買っておいただけけれど。ここは」

「それをどうされるので？」

「この御守りをこうして」

マンゴープリンの蓋の上にそれを置いた。まずは。

「置くでしょ。それでそれを」

「食べるので？」

「あたしじゃないわよ」

まずはそれは断った。

「この子に食べてもらうのよ。さっ」

そこまで説明してから子供の前にそのマンゴープリンを置いたのだった。上に御守りを置いたまま。

「これでいいわ。後は」

「これを手取るだけですか」

「ええ。幽霊だったら触れられないわ」

勝矢はすぐに子供の前からラーマの横に戻って答える。子供は目を閉じて座して読経をしている為やはり二人には気付かないのだ。それにしても見事に暗誦していた。

「これでわかるわよ」

「普通の子供ならよし。幽霊だったら」

「御守りで動けなくなっている間に逃げましょう」

勝矢の考えはこうだった。

「生まれてはじめてこの目で幽霊を見たことになるけれどね」

「私はこれで三回目ですけどね」

「見たことあったの」

「ええ、まあ」

何気に凄い経験をしているラーマであった。やはり只者ではない。

「実は前にそうしたところに行ったことがあります」

「経験豊富なのね」

「変わった経験なら幾らでも」

ということであった。

「ありますよ」

「そうだったの」

「ええ。まあそれで」

彼はマンゴープリンを見ながらまた勝矢に話をする。

「今もどうか、と見ていますが」

「どちらにしろこの子が食べた時にわかるわ」

こうラーマに述べた。

「その時にね」

「そうですね。それじゃあ」

「さあ、どうなるかしら」

真剣な顔で子供を見ていた。

「普通に食べられるかしら」

それを見守る。やがてその読経が終わった。そして目を開いた子供はそのマンゴーに気付いた。するとすぐにそのマンゴープリンを

手に取った。何事もなく。

「決まりね」

「人間ですか」

「ええ、普通のね」

勝矢はじつと子供を見ながらラーマに述べた。

「間違いないわ」

「ですか。それじゃあ」

「ええ。ねえ君」

「えっ!？」

タイ語で話し掛けると。慌てて勝矢達に顔を向けてきた。かなり驚いた顔だった。

「どうしてここに。そういえばこのプリンも」

「そのプリンは貴方にあげるわ」

「まずはこう彼に告げた。」

第六章

「安心しなさい」

「はあ」

「それはそうとしてよ」

そのうえで彼に尋ねるのだった。

「貴方。どうしてここにいるのかしら」

「僕がここにですか」

「そうよ。よかったら話してくれるかしら」

こうしてこの幼い修行僧に話を聞くことになった。聞けば彼は幼くして自ら仏門に入り修行に熱中していたという。それで時としてこの廃寺に入りそこで一人覚えた経を暗誦したりしていたという。あの通り道を抜けていつもここで一人修行に励んでいたというのだ。

何故ここで修行していたかというとまだ習っていない経ばかりなのでそれを勝手に読んでは先輩の僧侶達に怒られるからだ。それでここで読んでいたというのである。事情はこうだった。

話を聞き終えた勝矢とラーマは。まずはこの子供を寺院から出した後でお菓子を少し御馳走した。それから彼と別れ二人になって。怪しい酒場に向かう途中の道であれこれと話をしていた。

「わかってみればどうということはない話でしたね」

「そうね、全く」

勝矢は首を傾げ気味でラーマの言葉に頷いた。

「何てことのないね」

「何が出て来るかと思えば」

「出て来たのは真面目な子供が一人」

「とんだ拍子抜けでしたね」

「全くよ」

ぼやき気味に述べた。

「幽霊だったらどうしようって結構考えていたのに」

「その割には余裕でしたね」

「御守りがあったからよ」

そういうことだった。

「だから幽霊は出なかったのよ」

「そうですかね」

「そうよ。それにしても」

「はい？」

ラーマはここで話が変わったのを感じ取った。

「何かありますか？」

「ええ。いい話を書けそうね」

見れば勝矢はにこりと笑っていた。実に楽しそうな笑みだった。

「今日の取材はね」

「書けます？」

「ええ、書けるわ」

ラーマの怪訝な言葉にもはっきりと述べる。

「ちゃんとね」

「けれど幽霊じゃなかったですし」

「わかってないわね。あれは幽霊よ」

「ですがあれは」

「幽霊なの」

ラーマの言葉を否定しての言葉だった。

「あれは」

「けれど子供じゃないですか」

ラーマは正直に事実をありのまま述べた。

「あそこにいたのは」

「だから。あの子はいないのよ」

「いないのですか？」

「そう、いないの」

かなり強引にそういうことにするのだった。

「正確に言えはいなかったのよ」

「それは嘘ですよ」

「方便よ」

しかし勝矢は言う。

「これはね。方便なのよ」

「方便といいますと」

「あの子が正体だって言ったらどうなるの？」

勝矢は今度はあの子供のことを話に出すのだった。

「あの子に迷惑がかかるじゃない」

「それはそうですね」

これはラーマにもわかった。確かにあの子が幽霊の正体とわかれ
ばそれだけで周囲から何を言われるかわからない。彼はただ修行し
ていただけなのにこれはあまりにも惨いことである。ラーマもそう
考えたのである。彼にしる悪気のない子供をそうした目に遭わせる
のはしのびなかった。

「確かに」

「それにあたしにしても」

「勝矢さんにしろ？」

「そうよ。子供だったってわかったら」

彼は言う。

「どうなの？それって」

「書くに困りますね」

「そういうこと。事実を書いても面白くないわ」

彼はこう述べるのだった。

「事実を書いてもね。面白くとも何ともないわ」

「何ともないですか」

「幽霊の正体が子供でしたって書いても。そんなのは」

「ということ」

「幽霊はいたのよ」

こういうことにするのだった。

「わかったわね」

「いたのですか」

「ええ。これは売れるわ」

目を細めさせての言葉だった。まるで可愛い男の子を見たような顔になっている。

「見事にね」

「売れるんですか」

「幽霊の話は売れるのよ」

勝矢の本音だった。

「書けば書く程ね」

「嘘でもですか？」

「だから。方便としてよ」

また強弁してみせるのだった。

「子供はいないんでしょう？」

「はい」

それはもう決まっていることだった。二人の中では。

「じゃあいたのは幽霊よ」

「幽霊ですか」

「そうなるわね。だから」

「ここは幽霊と書かれるのですか」

「これだと誰もが得するじゃない」

「こうも言ってみせてきた。」

「そうでしょ？ 誰もが一緒だと」

「まあ確かにそうですね」

これにはラーマも納得する。

「あまり奇麗とは言えないですが」

「人間は誰だって汚いのよ」

勝矢の言葉は哲学めいてきていた。

「誰だってね」

「汚いんですか」

「奇麗でもあり汚いわ」

今度の言葉はこうであった。

「そして時には汚いことも必要なのよ」

「そうなりますか」

「誰もが楽しくなる為にはね。そういうことよ」

「そうですか」

「もっとも。醜いのは論外よ」

しかしこうも言い加えるのだった。

「自分のことだけを考えてやりたい放題する為に手段を選ばないのはね。醜いわ」

「それは醜いんですね」

「そうした人間は何処までも卑劣になれるから」
彼の言葉ではこうであった。

「何処までもね」

「まあそれはありますね」

ラーマも心当たりのあることだった。

「そうした人間は何処にでもありますね」

「そう。そして」

「大抵破滅しますね」

「汚いと醜いは違うから」

こう言う勝矢だった。

「汚いのはある程度は許されるのよ。それが他人の為なら」

「けれど醜いのは」

「エゴにはじまるから許されないのよ。だから末路は決まっているのよ」

「破滅ですか」

「ええ。それじゃあ今から」

「遊びに行くんですね」

話はそこに落ち着く。

「男の子相手に」

「名文の前祝いにね。そういうことよ」

「けれどそれは」

「醜くはないわ」

「こう言い繕う。しかし言い繕いではなかった。」

「汚くもないのよ」

「汚くもないですか」

「愛よ」

しかも愛と強弁する。これまたかなり強引だった。

「愛なのよ」

「愛ですか」

「そう、愛なのよ」

語るその目は恍惚としている。少なくとも虚言を語る目ではなかった。

「これは。だから」

「綺麗なのでしょうか」

「美しいのよ」

彼の恍惚とした言葉だった。

「これはね」

「左様ですか」

「じゃあ。その美しい行いの為に今から」

「遊ぶのですね」

「美の為に遊ぶ」

今度の言葉だった。

「それは綺麗なことじゃない」

「まあ言ってしまうばそうですか」

「じゃあ。行くわよ」

「はい」

二人で言い合う。そうして話を進めてまた言うのであった。

「男の子達と幸せのハーレムよ」

勝矢の顔がうっとりとなる。もう関心はそちらに完全に向かって

いた。そうして今その店に入る。満面の笑みをたたえ続けたまま。

お寺の怪 完

2008・5・19

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8051e/>

お寺の怪

2010年10月8日15時04分発行